

「生きて働く読みの力」の育成を目指す文学的な文章の指導
～「読み方」のリフレクションを取り入れた単元づくりを通して～

二本松市立杉田小学校 福島県教育センター長期研究員 菅野 智香子

1 研究の趣旨

中央教育審議会答申では、「学ぶことと自分の人生や社会とのつながりを実感しながら、自らの力を引き出し、学習したことを活用して、生活や社会の中で出会う課題の解決に主体的に生かしていく」ことへの課題が挙げられ、新学習指導要領では、「他の学習や生活の場面でも活用できる、生きて働く知識となる」ことへの重要性が示された。国語科においても、目標が約20年ぶりに改訂され、「日常生活に必要な国語」という文言が新たに明示された。「わかる」レベルの授業から、「使える」レベルの授業へと質的な転換が求められているのである。

国語科の中でも、文学的な文章の指導は、読解に重点が置かれると、ともすると、作品の内容理解だけで学習が完結してしまう。そのため、単元を通してどのような「読み方」が身に付き、どのように活用できるかを自覚できるようにすること、そして、その有用性を実感する読みを重ねることが必要である。

以上のことから、文学的な文章の指導において、「読み方」に着目しながら内容を読み味わう授業を構想するとともに、その「読み方」が他作品の解釈に活用・転移される汎用的能力として身に付くためにどのような単元を展開すればよいのかを明らかにしたいと考えた。そこで、その汎用的能力を「生きて働く読みの力」と定義し、研究を進めることとした。

「読むこと」領域の文学的な文章の指導において、以下の視点に基づいた手立てを講じれば、子ども一人一人に「生きて働く読みの力」を育成することができるであろう。

【視点1】「読み方」の有用性を実感させる習得・活用のある単元構想

【視点2】「読み方」の自覚を促すリフレクションの工夫

2 研究の概要

(1) 研究対象

第1年次（平成29年度）研究協力校 小学校第5学年2学級（44名）

第2年次（平成30年度）研究協力校 小学校第6学年2学級（44名）

(2) 授業実践における視点と手立て

【視点1】「読み方」の有用性を実感させる習得・活用のある単元構想

単元に身に付けさせる「読み方」を明確にし、単元を貫いて繰り返し使わせることで、そのよさや意義を実感させる。

○ 深い学びのある習得の場 ○ 学んだ「読み方」生かす活用

【視点2】「読み方」の自覚を促すリフレクションの工夫

無意識に用いていた「読み方」をメタ認知させることで、学んだ「読み方」の自覚を促す。

○ 毎時間のリフレクション ○ 習得と活用をつなぐリフレクション

○ 単元終末のリフレクション

(3) 実践単元（主教材）

小学校第5学年『世界でいちばんやかましい音』『注文の多い料理店』

小学校第6学年『風切るつばさ』『海のいのち』

3 成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 単元で学ぶ「読み方」を重点化するとともに、主教材で学んだ「読み方」を副教材や並行読書の本で活用する単元を構想した。この意図的な設定により、主教材の内容把握にとどまらず、「読み方」が他作品の解釈に生かされ、子どもたちに「読めた」「使えた」と実感させることができた。

② 三つのリフレクションにより、メタ認知の機会を設定した。特に、習得と活用をつなぐリフレクションでは、無意識に使っていた「読み方」に意味付けや価値付けをし、学級全体で共有しながら一般化することができた。子どもたちからは「この『読み方』を使ったから深く読むことができた。」という声が数多く聞かれた。

③ 全4回の実践の最後の単元では、副教材において、これまで学んだ複数の「読み方」を選んで解釈できるようになった。また、友達と自分の解釈を交流する中で、さらに深く作品を理解するために、教師が提示した作品以外にも、目的に応じた本を探そうと自ら動き出す姿が見られた。学んだ「読み方」を生かし、自分なりの読みを創りあげることができるようになっていた。

(2) 今後の課題

① 活用場面では、授業者による独自のルーブリックを用いて評価を行ったが、その客観性をさらに高めていく必要がある。

② 子どもが読みたくなる・使いたくなる副教材や並行読書の本の選定には非常に時間を要するだけでなく、経験や専門性が必要になってくる。図書館司書等を積極的に活用するとともに、活用事例を紹介し合えるシステムを検討したい。